

第1回 SDGs エコフォーラム in 埼玉



報告書

第1回 SDGs エコフォーラム in 埼玉実行委員会

2020年2月

※本報告書は、環境省「平成31年度地域における地球温暖化防止活動促進事業」の助成により作成しました。



SDGs エコフォーラム in 埼玉とは・・・

「SDGs エコフォーラム in 埼玉」は、これまで18年にわたり開催してきた「環境まちづくりフォーラム・埼玉」「低炭素まちづくりフォーラム in 埼玉」の実績を継承し、持続可能な社会の構築を見据えた新たな取組として名を改め開催します。県内において環境を中心とする活動を実践している団体、企業、行政、教育機関、地球温暖化防止活動推進員等が一堂に会し、情報交換、相互交流及び情報発信を通じて、SDGsの達成に寄与することを目的とします。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



実行委員の紹介

実行委員長 江田 元之

副実行委員長 安田 信一

実行委員 壹岐健一郎、池上 公子、荻原 洋志、加藤 真哉、川島 秀男
小嶋 直、小瀬 博之、小林 光春、櫻 博子、佐々木 努
鈴木 一真、曾根 茂、高野慎太郎、武田 侃蔵、田中 耕司
千葉 弘幸、土淵 昭、永倉 邦男、西森 勝一、原 芳彦
平田 俊一、星野 弘志、茂木 幸蔵、森 啓祐、吉田 征人

事務局 秋元 智子、後藤 正喜

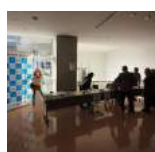
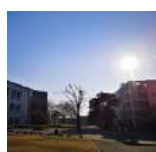
開催概要

日 時 2019年（令和元年）12月14日（土）10:00～16:30
会 場 東洋大学 川越キャンパス 7号館・2号館、他
主 催 第1回SDGsエコフォーラム in 埼玉実行委員会
共 催 東洋大学、埼玉県地球温暖化防止活動推進センター、パリクラブ21埼玉
後 援 かわごえ環境ネット、埼玉県、川越市
事 務 局 埼玉県地球温暖化防止活動推進センター
(特定非営利活動法人環境ネットワーク埼玉)

参加者数 延べ484名

目次

SDGsエコフォーラムとは/実行委員の紹介.....	1
開催概要/目次.....	2
当日のプログラム.....	3
基調講演概要.....	4
SDGsスピーチ概要/エコライフDAY感謝状贈呈.....	10
フォーラムの振り返りとこれから/フィールドツアー/パネル展示.....	11
分科会	
若者と市民の環境会議.....	12
あなたの暮らしで未来を変えよう.....	18
森・田んぼ・川の生きもの保全.....	20
私ごとから考えるごみ問題.....	25
SDGsを知ろう！入門編.....	31
環境経営の今・これから.....	36



当日のプログラム

1 挨拶 [10:00～10:10]

主催者挨拶	江田 元之	実行委員長
主 催 者	竹村 牧男	東洋大学 学長
来 賓 挨 拶	小池 要子様	埼玉県環境部長
来 賓 挨 拶	宍戸 信敏様	川越市副市長
来 賓	小宮山 泰子様	衆議院議員

2 基調講演「仏教から見た環境問題」 [10:10～11:10]

竹村 牧男氏 東洋大学 学長

3 2019年度少年少女国連大使によるSDGsスピーチ [11:10～11:20]

島村 仙氏 学校法人太田国際学園ぐんま国際アカデミー中等部3年生

4 エコライフDAY感謝状贈呈 [11:20～11:40]

受賞団体：株式会社日環サービス、リケンテクノス株式会社、川口信用金庫

5 フォーラムの振り返りとこれから [11:40～11:55]

安田 信一 副実行委員長・荻原 洋志 実行委員

6 昼食・パネル展示 [11:55～13:10]

パネル展示 [11:55～16:10]

こもれびの森フィールドツアー [12:30～13:00]

7 分科会 [13:10～15:50]

若者と市民の環境会議

あなたの暮らしで未来を変えよう

森・田んぼ・川の生きもの保全

私ごとから考えるごみ問題

SDGsを知ろう！入門編

環境経営の今・これから

8 全体会 [16:10～16:30]

9 交流会 [17:00～18:30]

I 環境問題の諸相等

① 人口の増加、②生物的多様性とその保全、③気候の変動、④森林の減少、⑤有害廃棄物
⑥土壌の劣化、⑦バイオテクノロジーに由来する危険性、⑧環境悪化を進めるエネルギー生
産、⑨人間の無知と変化への恐怖、⑩南北の対立、⑪対立する政府の政策、⑫軍事的不安定
と民主主義の欠如、⑬危険性の認知、⑭病原体、⑮都市環境、⑯労働環境、⑰資源の消失。

(1989年秋、スウェーデンのヨーテボリでの「エコロジー89会議」で提起された環境問題)

最近に加えて、海洋の徳熱・汚染等の問題が深刻である。 →

SDGs への取組へ 「気候変動非常事態宣言」へ

- 1) 科学・技術の進展による解決 (省エネ・無公害技術等の開発。地球システム)
- 2) 社会システムの変換による解決 (循環型社会への移行。社会システム)
- 3) ライフスタイルの転換による解決 (人間の欲望の抑止。行動レベル。人間システム)
- 4) 人間観・世界観の確立による解決 (生きる目標の自覚。思想レベル。文化システム)

II 仏教における環境としての自然の見方

1) 十界の世界観

十界とは 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩・仏
業果としての正報(身心)と依報(環境) 人間界=娑婆世界(忍土)

2) 唯識の環境観

	識内の対象	識内の対象の根拠
眼識	色	器世間
耳識	声	〃
鼻識	香	〃
舌識	味	〃
身識	触	〃
意識	法	一切法
末那識	我の影像	阿頼耶識の見分
阿頼耶識	五根・器世間・種子	[なし]

(阿頼耶識の阿頼耶は蔵の意味 能蔵・所蔵・執蔵(所執蔵)の三義有り)

唯識では、一人一人が八識で、その一人一人の阿頼耶識の中に身体と環境とが維持されているという。まず心(識)があって、その中に身体と環境とが維持されていて、そのうえで見たり聞いたり、環境に働きかけたりがなされているという。

人人唯識で、それぞれの器世間があるのである。元来、自然世界はただ一つかも知れない。

しかし個体と環境を一組、セットとしてとらえたとき、世界には無数のそのセットが存在していることになる。個体と環境のセットという観点からすれば、無数のセットがあり、その無数の自然世界があるといえるわけで、唯識の見方に近いものとなる。

我々の自己は、身体と環境が循環・交流する総体、あるいは身体を焦点に主体と環境が交流・交渉するその総体であるとするべきだということは、環境も自己自身に他ならないということである。こうした、身体と環境はセットとして捉えて、そこに一個の生命を見出すべきだという思想・哲学は、今日ふたたび見直されてよいものではないかと考える。

3) 浄土としての環境 仏国土の様子

大乘仏教では、一人一人が修行して、釈尊と同じ仏（覚った者）になることを目指している。仏になると、自分の住む国土はすっかり浄められ、浄土と呼ばれる仏国土となる。仏国土の荘厳に関しては、たとえば阿弥陀仏の極楽浄土の様子が、その内容を示すことになる。それは、およそ次のようである。

- 1) 極楽は西方に位置する（しかも無限の距離を隔てている）。
- 2) 地獄・餓鬼・畜生の三者が存在しない。
- 3) 日・月・星辰がなく、暗黒がない。
- 4) 須弥山等もなく、大海もなく、平坦である。
- 5) 池・泉または河があり、水は欲するままにある。
- 6) 七宝で樹木が飾られている。
- 7) 宝樹が風に吹き動かされて、快い音を出す。
- 8) 風が吹くと、地面は香高い美しい花でしきつめられる。……

その国土に住む人々の心の浄化も必要とされる。人々の心が浄められるということは、自我と物への執著から自由になることが根本である。多くの人々の心が浄められる時、この地上世界に浄土を建立することができるであろう。

ただし、浄土教思想では、基本的に「厭離穢土・権儀浄土」で、この娑婆世界を改善しようという思想ではない。

4) 娑婆即浄土の思想

①法華経の靈鷲山

『法華経』にはいろいろなテーマがあるが、その重要なテーマの一つに「久遠実成の釈迦牟尼仏を語る」ということがある。歴史上インドに現れた釈尊はいわば化身であって、その本体は、久遠の昔に実に成道を果たした仏であるという。ではその久遠実成の釈迦牟尼仏はどこにおられるのかというときに、実はこの地上にいるのだ、インドの靈鷲山だという。本当はこの世界はその仏さまの仏国土なのだ、というのである。

「然るに善男子よ、われは実に成仏してより已来、無量百千万億那由他劫なり。…われ成

仏してより已来、またこれに過ぎたること、百千万億那由他阿僧祇劫なり。これより已来、われは常にこの娑婆世界にありて、法を説きて教化し、亦、余処の百千万億那由他阿僧祇の国においても、衆生を導き利せり。かくの如く、われは成仏してより已来、甚だ久遠なり。寿命は無量阿僧祇にして、常に住して滅せざるなり。衆生を救わんがための故に、方便して涅槃を現わすも、しかも実には滅度せずして、実にここに住して法を説くなり。われは常にここに住すれども、諸の神通力をもって、顛倒の衆生をして、近しと雖もしかも見ざらしむ。」
（『法華経』）

②華嚴の蓮華蔵世界

華嚴宗では、智正覚世間・器世間・衆生世間の三世間のすべてが一人の仏である、と説く。この智正覚世間とは、覚った仏の悟りの智慧の世界、仏さま。器世間とは、仏の住んでいらっしゃる国土、環境世界。そして衆生世間とは、その仏国土の中の、菩薩とか神々とか、住んでいるさまざまな生き物。以上の三世間のすべてが、一人の仏であるという。

つまり、かけがえのない今・この自己、その自己が置かれている環境、その環境に暮らしているさまざまな生き物、そのすべてが一人の存在である。悟りを開いた仏と、その住んでいる仏国土と、その仏国土に住んでいるありとあらゆる生きとし生けるもののすべて、そのすべてが一人の仏であり、そこを「融三世間十身具足の法身仏」という。そこで、実は毘盧遮那仏の悟りの仏国土の中に我々も住んでいると、こういう見方にもなってくる。

この「三世間融合の仏」のことにに関して、湯次了榮という華嚴学者は、次のように説く。

「これ仏智を以て照らす境界のすべてを統撰して仏身とするがゆえ、山河大地も仏体であり、吾人迷界の生身も仏体であり、悟界の法報応の三身も仏体である。されば水の滾々と流るる音も、松吹く磯辺の風声も、曉知らする山鴉の啼く声も、妻恋う男鹿の声も、猿の啼く声も、吾人の言詞も、説法獅子吼である。」（『華嚴五教章講義』）

そこで、前の『法華経』（天台宗）の見方と華嚴宗の見方とが、どのように違うのかと言うと、『華嚴五教章』に次のような句がある。

「あるいは釈迦の報土は靈鷲山に在りと説く。法華経にいうが如し、「我れ常に靈鷲山に在り」等と。…故に法華を説く処、即ち実となすなり。菩提樹下にして華嚴を説く処を蓮華蔵十仏の境界となすが如く、法華もまたしかなり。……しかも未だ彼の処を即ち十蓮華蔵及び因陀羅等となすと説かざるが故に、別教に非ざるなり。」

そういうわけで、この世がそもそも久遠の仏のいのちをもとに成立していて、そこにいるあらゆる人々がその仏のいのちそのものに基づいて、その各人が他と無限の関係を結びながらそれぞれとして成立している、しかもこのことがはっきりと見られている世界が華嚴の浄土、蓮華蔵世界ということになるのではないかと思う。

③空海の環境観

空海も草木国土が仏身であることを語っている。『即身成仏義』には次のようにある。

「六大無礙にして常に瑜伽なり。……

いわく、六大とは五大（地・水・火・風・空）とおよび識となり。『大日経』にいうところの、「我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脱することを得、因縁を遠離せり、空は虚空に等しと知る」と。これその義なり。……

かくのごとくの六大能く一切の仏および一切衆生器等の四種法身（自性身・受用身・變化身・等流身）と三種世間（智正覺世間・衆生世間・器世間）とを造す。……

かくのごとくの経文はみな六大をもつて能生となし、四法身・三世間をもつて所生となす。この所生の法は上、法身に達し、下、六道におよぶまで、粗細隔あり、大小差ありといえども、しかれどもなお六大を出でず、故に仏、六大を説いて法界体性となしたもう。

もろもろの顕教の中には四大等をもつて非情となし、密教にはすなわちこれを説いて如来の三摩耶身となす。四大等心大を離れず、心色異なりといえども、その性すなわち同なり。色すなわち心、心すなわち色、無障無礙なり。智すなわち境、境すなわち智、智すなわち理、理すなわち智、無礙自在なり。能所の二生ありといえども、すべて能所を絶せり。法爾の道理に何の造作かあらん。能所等の名はみなこれ密号なり。常途浅略の義を執して種種の戲論をなすべからず。」

このように空海は、いわゆる物質界をも、仏を体としていると説いている。空海の他の著作の『卍字義』にも、「水外に波なし、心内すなわち境なり。草木に仏なくんば、波にすなわち湿（うるおい）なけん。……三種世間はみなこれ仏体なり、四種曼荼（大曼荼羅・法曼荼羅・三摩耶曼荼羅・羯磨曼荼羅）はすなわちこれ真仏なり」とある。

④草木国土悉皆成仏の思想

「草木国土、悉皆成仏」の句は、日本天台思想の中で誕生したという。能の中にもしばしば引用され、日本人の間にかなり浸透していよう。

この思想の淵源は、天台智顛（538～597）の『摩訶止観』に出る、「一色一香無非中道」（一色一香、中道に非ざる無し）にある。この言葉は、有情ではない非情にも仏性があるという思想を説くものとして受け止められていく。のちの荊溪湛然（711～782）は、『止観輔行伝弘決』巻一において、非情にも仏性があるということを十義によって強調している。

こうした中国天台教学を背景に、日本においては最澄（767～822）ののちに、この問題が大きく扱われていくことになる。そうした中、忠尋（1065～1138）作と伝える『漢光類聚』（実際はさらに後世の作らしい）は、ともかくその思想の論点・解釈についてまとめたものを示している（大正 74、380 頁、上～下）。そこには、「……草木成仏に七重の不同有り。一、諸仏の觀見、二、法性の理を具す、三、依正不二、四、当体の自性、五、本より三身を具す、六、法性の不思議、七、中道を具す。中道とは、一念三千、草木もまた欠かざるが故に云う」とあり、七種の理由から、草木成仏ということが言われうるとするのである。詳細は省くが、ここには以下のような自己と自然の関係の了解があるであろう。

- ①自己の完成と自然の完成は連動している。(諸仏観見)
- ②自然の一つ一つが、自己と自然を超える究極のいのちに貫かれている。(具法性理)
- ③自己と自然は、不二であり、切り離せない。(依正不二)
- ④自然の一つ一つは、それ自体において絶対的な価値を有している。(当体自性)
- ⑤自然の一つ一つは、もとより靈性的表現を持っている。(本具三身)
- ⑥本当の自然および自己は、言葉を離れている。(法性不思議)
- ⑦自然の一つ一つは、他のあらゆる存在と関係し、他を自己としている。(具中道)

これらによれば、本当に草木自身が修行して未来に成仏すると見ている説は少ないといわざるをえない。特に④において、「草木成仏というのは、草木が仏のしるしとされる三十二相八十種好を実現するという事ではない。草木の根・茎・枝・葉は、それぞれそのままに、その本性そのものであるところを、成仏というのみである」とあったのは、事実上、他(②・⑤・⑥等)にもいえることなのであろう。

こうしてみると、天台の草木国土悉皆成仏の基盤には、自己と環境を超えた心の中に、自己と環境とが包まれて存在しており、そこにおいて自己と環境とは切り離せず、あるいは本性上一つであるとする見解があることが知られる。やはり天台教学の中にあっても、自己は、自己だけに閉じられた存在ではなかった。さらに、あらゆる存在は仏のいのち(法性)に貫かれていて、すでに仏そのものである、というのである。

以上、もし「この世界が本当は仏の国土なのだ、それが実はさとの眼から見た本当の世界なのだ」と、そう教わったら、少なくともことさらに自然世界を傷つけたり損ねたりすることは慎んでいこう、むしろ環境世界そのものをやはり仏として拝み、大切にしていこうという根本的な姿勢が築かれるのではなかろうか。

III ディープ・エコロジーの思想

哲学としてのエコロジー、ディープ・エコロジーを説いたのが、ノルウェーのアルネ・ネスである。アルネ・ネスの思想の根底には、自己の拡大による本来の自己実現という考え方がある。自分が接しているもの、関係しているものは自己そのものにほかならず、その全体が自己と了解すべきだというのである。

「人間の成長に応じ自己と他の存在との同一視・同一化が起こり、それゆえ自己が広がり、またその深みが増す。「他者のなかに自分を見る」ということが起こる。自分が同一化した相手の自己実現が妨げられると、自分自身の自己実現も妨げられてしまう。それゆえ、わたしたちの自己愛は他者の自己実現を助けるというかたちでも表われる。「みずから生き、他者も生かす」が原則になるのである。このように、愛他主義(義務的・倫理的に他者の利益を考慮すること)により達成されることはすべて、そしてそれ以上のことが、自己を広げ深めることで達成できる。カントの言葉を借りると、道徳や倫理に従う・従わないではなく、

美しい行動をとるということである。」(アラン・ドレクソン・井上有一共編、『ディープ・エコロジー——生き方から考える環境の思想』、昭和堂、2001年、46～48頁)

・アルネ・ネス「ディープ・エコロジー運動の支持者に見られる傾向の指摘」

- ① 質素な手段を用いる ②反消費主義をとる
- ③民族的・文化的な違いの価値を理解し、これを尊重する。
- ④欲望ではなく不可欠の必要を満たす努力をする
- ⑤刺激の強い経験ではなく、深く豊かな経験を得ようとする
- ⑥自然のなかで生きることを心がけ、利益社会ではなく共同社会の発展に努める
- ⑦すべての生きものの真価を認め、これを尊重する
- ⑧身近な生態系の保護に努める
- ⑨人間が飼う動物と競合する野生生物を保護する
- ⑩非暴力などに基づく行動をとる(同時に菜食主義に向かう)
- ⑪第三世界、第四世界の状況を考え、自分の生活のあり方が貧困のなかで暮らす人々の生活に比べ、あまりにも高水準であまりにも違ったものにならないようにしようとする。ライフスタイルの地球規模の連帯をめざす
- ⑫どこでも、だれにでも実現可能な生活のあり方の真価を理解し、これを尊重する。このようなライフスタイルとは、他の人々や人間以外の生きものに対しても、不正を働くことなく維持できる可能性を持つ生活のあり方である。(アルネ・ネス「ディープ・エコロジーとライフスタイル」1983、『ディープ・エコロジーとは何か——エコロジー・共同体・ライフスタイル』、93～94頁)

一方、仏教では、あらゆる現象を貫く本性を空性と見ており、それは平等・無差別である。しかも個々の現象は縁起の関係にあり、相互に他無しではありえない。その関係性は、重重無尽である。自他も同じで、自己は他者と本性において平等・無差別で一体であり、かつ相互に関係しあい、支え合っている。この関係性は空間的のみならず、時間的にも成立している。ここから、共感・共苦に基づく世代間倫理も成立するのではないか。

IV 現代の環境問題と仏教思想の貢献

- ① 身土不二の思想による自己(個体)概念の拡張
- ② 娑婆即寂光土の思想による環境保全への意思の発揮
- ③ 人生の目的の自覚による欲望を制御する生活の重要性の認識と実践
- ④ 他者との空間的・時間的關係性(平等性)から見た責任、世代間倫理の自覚へ

2019 年度青少年国連大使による SDGs スピーチ

学校法人太田国際学園ぐんま国際アカデミー中等部 3 年生 島村 仙氏

2019 年度青少年国連大使日本代表に選ばれ、スイス・ジュネーブの欧州国連本部を訪問し、SDGs について勉強された島村仙さんからは「ペットボトル飲料を飲むことについて、ほんの少しの罪悪感を持とう」、「今日の帰り道にごみを拾ってみよう」など、環境活動を実践されている人だけでなく、学生から大人まで多くの方の胸に刺さる内容でした。



島村 仙さん

エコライフ DAY 感謝状贈呈

エコライフ DAY 埼玉 2018 において、多くの方に参加いただいた企業・団体を表彰するもので、埼玉県 小池環境部長から以下の団体へ表彰状が授与されました。



左から、江田実行委員長・(株)日環サービス 廣瀬代表取締役・リケンテクノス (株)水野マネジメント課長・川口信用金庫 木本専務理事・埼玉県 小池環境部長

フォーラムの振り返りとこれから

これまでのフォーラムで実行委員長を務めた荻原洋志と、今回副実行委員長を務める安田信一より、9年間に亘って開催した「低炭素まちづくりフォーラム in 埼玉」の総括と、これからのフォーラムにおける抱負と課題についてご紹介しました。



安田副委員長発表の様子

こもれびの森フィールドツアー

東洋大学川越キャンパス内にある「こもれびの森」では、大学教職員・学生・地域住民等が協働で管理し、多様な生物が棲める森として維持する活動を行っています。今回は小瀬博之教授ご案内のもとフィールドツアーを開催し、約30名が森の植生や自然再生の活動について学びました。



こもれびの森フィールドツアーの様子

パネル展示

2号館通路等を利用して、団体・企業等によるパネル展示会を開催しました。



出展団体

1	環境教育支援ネットワークきづき	8	株式会社タカヤマ
2	NPO 法人環境住宅研究会	9	羽生市ムジナモ保存会
3	公益財団法人サイサン環境保全基金	10	かわごえ環境ネット
4	原市沼を愛する会	11	環境経営の今・これから分科会
5	公益財団法人さいたま緑のトラスト協会	12	埼玉県地球温暖化防止活動推進センター
6	川越環境保全連絡協議会	13	東洋大学 小瀬ゼミ
7	東洋大学 理工学部	14	東洋大学川越キャンパスこもれびの森・里山支援隊

分科会「若者と市民の環境会議～SDGs から素晴らしい未来を語ろう！～」

目的

【参加者数 22 名】

地球や社会が持続可能であるために、私たちは何が出来るのか。SDGs は、ジュニアからシニアまで、企業から教育現場まで、全ての人が持続可能性を共有することが出来る「夢」のような場だと考える。分科会をとおして、行政、市民、教育それぞれの立場から、SDGs 達成への可能性を探り、今できることを共有する。

プログラム

- 1 情報提供「埼玉県における環境施策の取組」
森田 貴裕氏（埼玉県環境部温暖化対策課 総務・エコライフ推進担当主事）
- 2 講演「アースデイ・イン・川越の取組について」
岩澤 勝己氏（第 21 回アースデイ・イン・川越実行委員会委員長）
- 3 講演「学校・家庭・地域とともに進める環境教育～グリーンフラッグを柱に～」
浜田 祐加氏（新座市立八石小学校長）
- 4 講演「持続可能な社会をつくる教育とはなにか」
高野 慎太郎氏（学校法人自由学園教員）
- 5 まとめ

開催概要

- 1 講演「アースデイ・イン・川越の取組について」
岩澤 勝己氏（第 21 回アースデイ・イン・川越実行委員会委員長）

アースデー・イン・川越は 1999 年から開始しており、今年からは SDGs をテーマに据えた。今回の特徴は、学生とともに企画・運営を行った点である。芝浦工業大学、尚美学園大学、学校法人自由学園の学生さんたちと共に内容を考える中で、新たな視点をいくつも頂くこともできた。同時に、大学生は、授業として参加しているため、実行委員会に参加するか否かなどは、学生に委ねられている部分も多く、学生の参加度合いをどこまで求めるかが苦慮した。しかし、現在、SDGs は企業、教育など、様々な分野で注目されているが、今回のアースデーのように、各分野の方が一堂に会して議論しあうということは大変有意義なことだったと思う。立場を超えて、話し合うということが重要。アースデーには、ボーイスカウトの団体も参加した。ボーイスカウトと SDGs は、一見結び付きにくいと思われるかもしれないが、生活の中から SDGs を心がけ、実現するということが大変重要なことである。私たちが活動している「川越昭和



の街」は、SDGs 先進地域になるべく、活動を行っている。しかし、困難や不十分なところも多い。皆さんのお力を借りながら、前進していきたい。

2 講演「学校・家庭・地域とともに進める環境教育 ～グリーンフラッグを柱に～」

浜田 祐加氏（新座市立八石小学校長）

新座市立石神小学校での取り組みについて紹介したい。平成 23 年度より、エコ活動に力を入れ始め、「グリーンフラッグ」の取得を大きな目標として、環境教育に力を入れている。「グリーンフラッグ」とは、環境教育の取り組みが一定の基準を満たすと与えられる緑の旗のことである。



「緑のカーテン」「節水・節電」「エコキャップの回収」「校内のビオトープの活用」「エコ新聞の発行」などの環境活動を展開し、グリーンフラッグ取得に至った。過去の取り組みでは、先生や地域の大人に頼ってしまうところがあったが、昨年度は自分たちの学校の環境を良くするにはどうしたらよいのだろうと生徒たちが考え、積極的に活動が出来るようになった。

「ゴーヤ」を種から育て、緑のカーテンを作るとどのくらいの CO2 の削減につながるかについても考えた。そして、このグリーンカーテンを実施したことにより 57,162 キログラムの二酸化炭素を減らすことも出来た。また、収穫したゴーヤの種は、家庭や地域の人たちに配布した。

校内に作られたビオトープは、多くの生徒たちにとって、観察の場になっている。新座の生き物呼び戻すために、今年は、新たに巣箱を取り付けた。エコ新聞の発行は、エコスクール委員が交代で担当し、石神小学校のエコスクールプログラムについて全校、また家庭に知らせることが出来た。これからも石神小学校で取り組んでいる環境活動を、地域の方々とも協力してもっと盛り上げていきたい。

3 講演「持続可能な社会をつくる教育とはなにか」

高野 慎太郎氏（学校法人自由学園教員）

【日本における環境教育の課題は何か】

「持続可能」とはよく言われるが、日本の環境教育は本当に「持続可能」なものになっているか。内閣府がまとめた「生物多様性認知度等調査」(2016)によれば、「あなたは自然について、どの程度関心がありますか」との質問に対し、「非常に関心がある」と答えた人々の割合は、2007 年 27.4%、2011 年 13.3%、2013 年 12.1%、2016 年 11.0%と、約 10



年で20%程度の減少傾向にある。また、「全く関心がない」と答えた人々の割合は2007年11.6%、2011年20.4%、2013年21.4%、2016年25.1%と、約10年間のあいだに倍増している。この間、数多の「優れた」環境教育が行われてきたのも事実である。「持続可能性」とか、「環境教育」ということの意味を、改めて考えてみる必要があるのではないか。

今日のフォーラムのタイトルでもある「エコ」ということについてはどうか。ライフメディアリサーチの調査結果によれば、「あなたは普段の生活でエコを意識しているか」との問いに対して、日本人の8割が「はい」と答える。一方、「エコを意識するようになったきっかけ」については、「節約のため」が全体の4分の1の割合。「日ごろ行うエコ活動」については、1位節電、2位ごみの分別、3位節水、4位詰め替え商品の購入という順になっており、「ごみの分別」を除いたすべての項目が節約を目的とする。また、「多少高くても環境配慮商品を購入したい」と答える人の割合は、8パーセントという驚きの低さである。

「節約に繋がる限りにおいてはエコを心がける」という日本人の環境意識は欧州の環境先進国と異なる。例として、旭化成ホームプロダクツ株式会社が、20歳から59歳のドイツの主婦208名（子供のいる主婦と子供のいない主婦各104名）と日本の主婦208名（子供のいる主婦と子供のいない主婦各104名）を対象に実施した「家事に対するエコ意識調査」を参照しよう。「家事にエコを取り入れる理由」の設問で、ドイツの6割が「環境保全のため」と答えるのに対し、日本の8割が「節約のため」と答える。通常商品よりも割高になる「環境配慮洗剤」を使用する割合は、ドイツ7割、日本2割と大きく差がつく。

こうした状況は、日本・ドイツ両国における環境教育の「成果」に他ならない。問題は、日本において、環境教育やESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）が斯様な盛り上がりを見せているにも拘わらず、どうして、それらが「持続可能性」と接点を持つことがないのか、ということ。議論は、この点から開始されるべきではないか。

【教育・教室に見られる病理】

「優れた」環境教育の事例を見ると、生徒は実にカラフルな「環境新聞」を書いている。あるいは、「ごみゼロ運動」において、実にたくさんのごみを拾ってくる。目に見える形で成果が出れば、めでたく「環境教育」が成功した、ということになるわけだが、私たちは、教室における生徒の行動が、卒業後の実生活に繋がらない要因は何だろうかと問い直されなければならない。先賢は「優等生病」の怖さを教えている。大人が考えている以上に、子どもたちは「器用」なのだということである。教師の意図や願望を見抜いて、その望みの通りに振る舞うということは、案外、難しいことではない。一般に、教室という場所は評価がなされる場所なのであって、子どもは点取りゲームを繰り返しており、教師への「お付き合い」が横行する。「お付き合い」で書かれた作文を見抜か（け）ずに、「模範」と褒め散らかすことの愚。かくして、「優れた」環境教育は量産されるのである。

ある意味において、教師を見くびっているのだとも言える子どもに向かって、「その根性がけしからんだ」とは、私には言えない。子どもたちのかかる振る舞いは、鏡である「教

師」の姿に、浅ましくも功名心が見え透いているということの反映であろうし、制度としての学校教育というものの自体が、「一番病」「優等生病」といったかたちで現れる。評価・出世・名声を求める大人の側の病理そのものによって駆動されてきたのだ、ということは、鶴見俊輔や竹内好といった先達が教えるところである。

【教室・教育と生活を結ぶ道】

教育が教室の中だけで行われている限り、つまり、「生きる」ことへの結びつきを求めない限り、教育の取り組みは机上の空論であって、間違っても「持続可能性」などという理想とは、何れの接点をも持たない。「教育全体が目指しているのは唯一の科目なのです。それはいろいろな形で表されてはいますが、『生きるということ』なのです。この単一な統一体と結びつかないかぎり（略）何の役にも立たないのです」（ホワイトヘッド『教育論』法政大学出版局,1972）。

ある人は教室で行われる学びを「脅しや褒美、恐怖や欲望の圧力下で行われる、人生から切り離された学習」とした（ホルト『なんで学校へやるの』一光社,1984）。同じ人物が、家庭での学びとして位置付けたもの、即ち、「主体的で目的に満ち、意味に溢れた生活および仕事」というものを教室で実現すること。持続可能性を志す教育においては、このことがいつでも大きな課題であるはずだ。

お前はどうかと問われれば、常にそうした問題意識を持って授業を行おうと心がけてきたと弁解するほかない。子どもの関心に従って、貧困や環境問題、人権の問題について授業で扱い、実際に社会に働きかける活動を行ってきた。特に、ここ5年ほど授業で扱ってきたのは、LGBTと呼ばれる性的少数者の人権の問題である。

そうした中、ある生徒が寮で性に関するカミングアウトを行った。カミングアウトには、私自身も責任を感じるころがあった。授業で、LGBTに関する話題を扱いながら、希望を語ってきたからだ。カミングアウトが起きた翌日、本人を含めた複数の生徒が相談に来たときに、仕事とは関係なしに、生徒と勉強会を始めよう、そして、この子どもたちと一生関りを持っていようと思った。

2019年で3年目になるこの勉強会は、卒業後も関わる生徒も多い。「持続可能性」という理想への一つの試みとなるかもしれない。ここで、内容について私が語っても良いのだが、私のゼミで関連する活動を行っている生徒を同伴して喋ってもらい、生徒の学びの場とするのが、私の一種の「癖」のようなものである。いつもながらに、生徒から語ってもらいたい。

ただ、授業がきっかけとはいえ、こうした活動が展開されたのは、子どもがそれを望み、また、私もそう望んだという、いわゆる中動的な交わりの産出物にすぎないのであって、子どもにも私にもそうした「覚悟」があったということである。決して私が指導したことでも狙ったことでもない。そもそも人を「指導する」などということは不可能であるし、また、人権に関わる活動を手柄顔に誇るほど、浅ましく、また、「教育」という営みから程遠いことだと思っている。

【自由学園高野ゼミのLGBTチームの活動 木村翠（自由学園高等科3年生）】

3年前、友人のカミングアウトをきっかけに、その子をよく理解したい、なぜ彼が苦しまなければならなかったのか、という思いをもとにできたグループです。寮でカミングアウトがあって、当時の同じ寮部屋だった仲間が朝まで悩んで、高野先生を尋ねました。授業でLGBTを始めとする社会の問題を扱っておられたからです。僕がゼミに入ったときは、結成1カ月目くらいでした。勉強会でキリスト教がテーマだったので、面白そうだと思って入りました。いまでは、多様性ゼミ（高野ゼミ）として、学外からの参加者も迎え、扱うテーマも剣道、ウルトラマン、ラップ、ロック、環境問題、プリン、遊戯王、映画など、どんどん広がっています。

成立当初は、まず、性に関する知識を持つことから始めました。文献は100冊以上、当事者や専門家へのインタビューは40名以上行いました。5カ月ほどたったある日、地域のイベントで活動内容を発表しました。その時、批判的な意見を沢山頂きました。「少子化はどうなるの?」「どうして、そういう人たちのことを考えなきゃいけないの?」などです。その時、初めて、当事者の人が生きる世界を体験できたように思いました。

それからは、社会を変えるための働きかけをしなければ、と強く思いました。僕らの問いや思いは、より切実なものになりました。その後、「社会に働きかける」ということを軸に、勉強会の開催、フェスへのブース出展、テレビや新聞などでの発言を繰り返していきました。高野先生は、教育学の論文や文章を書いたり、より理論的な部分を講演会で語ったりして、様々な層に働きかけながら援護射撃をしてくれています。活動の幅を広げると、その分傷ついたり、悩んだりすることも増えます。それでも、先生と雑談をしたり、仲間と一緒にご飯を食べたりする中で、迷いは消えて、勇気になります。

活動の中で大事にしているのは「熟議」です。勉強会でも、フェスのブースでも、参加してくださる方と徹底的に対話をしています。その中で、賛成・反対それぞれの論点を明らかにしたり、偏見を持つ人にはその背景を聞いていくことで、意見の相違を乗り越えて繋がる事ができています。3年前から「熟議」という言葉を学校でも繰り返してきました。3年のあいだに、学校では、服装に関する校則が変わったり、体育祭の際の服装が変わったり、共学化の方針が出されたりと色々な成果がありました。このような学校を変える取り組みが、NHKの番組「クローズアップ現代」で取り上げられました。

このように成果を感じる一方で、新たな課題もあります。熟議に無関心な人や議論についていけない人がでてくることです。しかし、そうした人々を取り残して進んでいくことは間違っています。そこで、最近は無関心な人や良く理解できない人でも熟議に入ってこられるような「入口」を増やすにはどうすればよいかと考えるようになりました。高野先生がゼミで扱う領域がどうしてもこんなに多岐にわたっているのか、という議論になった時に、「入口」（当初の参入動機）と「出口」（持続可能な活動動機）を分ける社会設計についてお話を伺いました。ああ、そういうことだったのかと納得しました。最初、僕たちの目の前にはなんだか楽しそうな「入口」があって、何気なく入ってみたら、気が付いたら高いところ

まで登っていた。そんな感覚です。こうした入口をどれだけ増やすことができるか、挑戦が続きます。

4 まとめ

紛れもなく私たちの社会をつくるのは、一人一人の「市民」です。環境や暮らし、また、人権の課題について、一人一人が少しでも気にかけるようになることができれば、私たちの社会は少しずつ変わるはずです。この分科会では、そうした希望をみることができました。

分科会「あなたの暮らしで未来を変えよう～家庭の省エネから温暖化を考える～」

目的

【参加者数 36 名】

一人ひとりができる家庭の省エネからの温暖化対策・気候変動対策を考えることを目的とする。家庭の省エネ・CO₂ 排出削減アクションの効果をどのように把握するのか、またアクションをどのように波及させていくのかを意識し、誰もが取り組める小さな省エネの繰り返しから温暖化対策・気候変動対策にアプローチするきっかけづくりを行う。

プログラム

- 1 講演「小さなエネルギーで豊かに暮らせる社会をつくる」
野池 政宏氏（(一社) Forward to energy life 代表理事）
- 2 ワークショップ「省エネ・CO₂ 排出削減の診断アドバイザー体験ワークショップ」
- 3 ワークショップ総評

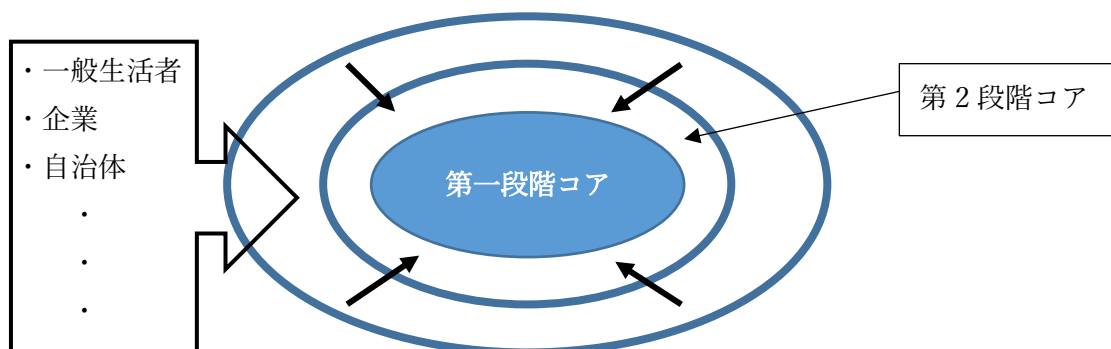
開催概要

1 (一社) Forward to energy life

温暖化対策は待ったなしの状況のなか我々に何ができるのか。国の政策や技術開発に頼る他に、自分自身の暮らしを変えることは間違いなくできる。暮らしを変えることの中でもっとも直接的にできるのは、自分の住まい方を変えていくこと。このことに関わるための情報や場は十分に用意されているので、それをどう広く伝えていくか、うまい伝言ゲームの方法をみんなで考えようという趣旨で講演をいただいた。



省エネのプロ（地域アドバイザー拠点）を第1段階のコア、それを取り囲む一定の知識を持つ情報提供者を第2段階のコアとし、その周りの一般生活者、企業、地方自治体等への活動の波及イメージを提示し、分科会受講者へ第2段階コアへの参加を呼び掛けた。また、家庭の省エネの物差しとして消費エネルギーを平均の1/2を目指す「1985アクション・ナビ」の紹介や、レベル別の省エネ情報取得のテキスト紹介が行われた。



2 ワークショップ「省エネ・CO2 排出削減の診断アドバイザー体験ワークショップ」

参加者が省エネ・CO2 排出削減の診断アドバイザー側となる体験をすることで、参加者に日々の省エネ活動への理解やモチベーション向上にしてもらい。さらには省エネ波及のコアになるきっかけとなることを目指した。

診断を受ける受診者モデル「むさしさん家族」を準備した。「むさしさん家族」は、うちエコ診断で年間 CO2 排出 5,270kg、平均比較 1.0 倍、100 世帯中 47 位という、ちょうど日本の平均的な家庭のデータとした。「むさしさん家族」には、分科会実行委員がなりすまし、各グループに一人ずつ入り参加者の質問に答えたこととした。

参加者を 4 グループに分け、各グループメンバーは、「むさしさん家族」の基本情報を見ながら分科会実行委員へヒアリングを行い、省エネや CO2 排出削減のためのアドバイス項目を抽出した。

抽出されたアドバイス項目を全体で共有した後、講演を行った野池氏と、日本一節電する新聞記者の斎藤健一郎さんを加え総評を行った。アドバイス項目は暮らし方や住宅設備の更新、交通手段まで偏りなく網羅されており、参加者の基本的なレベルの高さを感じた。また、今回は東洋大学学生の参加が多くみられた。両講師からは積極的な省エネ・CO2 排出削減アクションへの参加と連携の要請、合わせて若い世代へのエールが贈られた。

3 総評

フォーラムには環境に関して一定以上の知識や理解を持った方が多く集まることから、分科会受講者が全員参加できる内容を企画した。過去行ってきたパネルディスカッション形式では参加が偏るため全員参加のワークショップとし、さらに参加者が診断アドバイザー側となることで、主体側として体験する内容とすることができた。ワークショップ当初はやや戸惑いがちの参加者だったが、後半は大学生の発言も増えて活発な内容となった。ワークショップ前に野池氏による講演で提示された省エネアクションの第 1 段階、第 2 段階コアからの波及イメージを、若い参加者に担っていただけるきっかけとなることを願いたい。



分科会「森・田んぼ・川の生きもの保全

～人と自然の共生を学んで、生物多様性を目指そう～

目的

【参加者数 39 名】

今、生態系・生物多様性は全世界で危機的な状況にあり、温暖化と並ぶ深刻な地球環境問題となっています。私たちは日々、いろいろな生きものの恩恵を受け、豊かな暮らしを享受していますが、その一方で生物多様性に様々な影響を与えています。生物多様性を守るために、私たちにできることは何か、様々活動事例から一緒に学び、身近な生活を見直す機会とします。

プログラム

- 1 講演「生きものに優しい田んぼから繋がる人と地域の輪」
藤岡 重歳氏（かわごえ里山イニシアチブ 理事）
- 2 講演「川越の生物多様性保全」
加藤 環氏（かわごえ環境ネット 自然環境部会長）
- 3 講演「荒川流域の生きもの調査報告」
川島 秀男氏（NPO 法人荒川流域ネットワーク 理事）

開催概要

- 1 講演「生きものに優しい田んぼから繋がる人と地域の輪」

藤岡 重歳氏（かわごえ里山イニシアチブ 理事）

埼玉県川越市郊外で、無農薬・無化学肥料による田んぼ作りをフィールドにした環境保全活動と地域作りを行なっている NPO 団体です。活動エリアは福田地区 1.6 町を「Co 江戸かわごえ初雁の里」と命名している地域です。

ビジョンと目的は、「人がつながり、生きものと共生する里山・街づくり」～田んぼからつながる・ひろがる、生きもの・ひとの輪～で、自然と調和した、生きものにやさしい田んぼ活動を行うことで、あらゆる人と生きものが共生する環境豊かな地域づくりを目指しています。

活動の契機は、2017 年 2 月「田んぼの 10 年プロジェクト全国集会 in 川越」でした。これまで実践してきた①子どもたちにつなげる食と健康、②農家・非農家連携による環境と経済の両立、③土や生きものに触れる農業体験、④米づくりだけではない田んぼ価値(環境・文化)の継承、⑤休耕田を減らし、豊かな田園風景の保全、⑥田んぼ活動を活かしたコミュニティづくり、⑦環境にやさしい農法で河川を汚さない農業の実践、から環境にやさしい田んぼ活動をとおして、お米づくりとマコモ栽培を始めました。

米づくりについて

①消毒不使用、温湯による種子消毒とポット式での上部な苗づくり

②マメ科緑肥(ストロベリーキャンドル)の活用で化学肥料ゼロ,レンゲ草

マコモ(真菰)とは、イネ科で大型の水生植物。菌類により肥大化した「マコモタケ」を発生、中華料理の高級食材となる。

連携の輪としては、大学連携：・大学連携東洋大学総合情報学部、・十文字学園女子大学、
・日本薬科大学

市民(技術者)連携：除草ロボットの開発

地域との連携：井戸掘りプロジェクト、地域活動への参加協力と住民との交流、街おこし連携、生きものとの共生と環境教育など

活動の評価として、2016年10月「生きへの定連携事業、2019年2月彩の国埼玉環境大賞、12月生物多様性アクション大賞「入賞」。

今後の展望としては、Co江戸かわごえ初雁の里へ体験型エコツアー、農福連携への模索—マコモ茶、マコモ苗の販売を予定

2 講演「川越の生物多様性保全」

加藤 環氏 (かわごえ環境ネット 自然環境部会長)

川越の土地利用を見ますと大半が公園・緑地、農地で占められています。

川越の生きもの：自然環境の特徴として山や丘陵、湿地がない。河川に恵まれ、湧き水もわずかにある。武蔵野の遺構として雑木林が残っている。

生きものの多様性：種の数多くない、開発でさらに減っている。生態系が成立しているエリアは少なく、外来種が席卷している場所が多い。自然的景観から見て、水田地帯の生きもの→当然だがイネ以外は排除されるので植物相は貧弱である。動物相はトンボ、水生昆虫、カエル、野鳥など、有機農法になると豊かになる。

河川周辺の生きもの：河川環境は次第に改善されてきている。水質がよくなり魚類が回復したケースもある。河川敷、土手は今や、外来種で占領されている。

武蔵野の雑木林の生きもの：川越ではこのエリアが生物多様性のコアになっている。川越で記録される絶滅危惧種の殆どがここに存在する。

「(仮称)川越市森林公園」計画地：

川越でもまとまった雑木林(計画面積40ha、公有地化面積10ha)として、平成16年

埼玉県、川越市の生物種数

環境ネットとして県民参加モニタリング調査10年間、川越市の生き物調査5年間

	埼玉県 (2011,2005年版)		川越市	
	確認種	RD種	確認種	RD種
植物				
維管束植物	2372	769	700~	30~
維管束植物以外	2524	266	?	?
動物			哺乳類・両生類・ 爬虫類	10~
脊椎動物	503	203	野鳥	120~
			魚類	35~
無脊椎動物	9793	584	昆虫	226~
				4~

に基本構想が策定されたが「実現」に至っていない。公有地と借地を繋いで「森のさんぽ道」が敷設されている。散策に訪れる市民は多い。

① 生きものつながり・生態系



- ② 雑木林の現状：手入れが放置された林では本来の植生である照葉樹林帯にもどりつつある。
- ③ 生物多様性保全のための手入れ：絶滅危惧種や在来種を守るため、選択的草刈りや照葉樹の間引きを毎月2回実施している。
- ④ 生物多様性保全のための調査：20年近く調査を続け、植物は300種（内、90種は樹木）ほどを確認。最近は外来種が入り込んでいるが、蔓延するほどではない。動物では昆虫が多く400種を超す。昆虫以外では野鳥、哺乳類ではアズマモグラ、カナヘビ、その他ではヤマナメクジ、ミミズなどが多い。チョウや甲虫などは専門家が5年間調査し367種を確認。
- ⑤ 観察会・自然学習支援：植物観察会（3月）、キノコの観察会（7月）、虫の観察会（9月）、地元小学校3年生の自然学習の場として利用
- ⑥ 伊佐沼はスゴイ！2018年11月24日キタミソウを発見！
キタミソウは、「埼玉県希少野生植物の種の保護に関する条例」指定種。伊佐沼は野鳥のメッカでいつもカメラを構えた人がいる。珍しい野鳥が飛来した時は大変なカメラの放列になる。そこに昨年、日本でも数か所しか確認されていないキタミソウが発見された。かなり以前から生育していたはずだがあまりに小さく地味なので誰も気づかなかった。
- ⑦ これから：武蔵野の雑木林といわれる生物多様性の中心にあたるエリアでは、20年間に雑木林162haが減少した。この割合が続くと、あと40年で消失する。

3 講演「荒川流域の生きもの調査報告」

川島 秀男氏 (NPO 法人荒川流域ネットワーク 理事)

(1) 荒川流域の水質調査

1995 年に国土交通省関東地方整備局荒川上流河川事務所の協力を受け、27 団体が参加して水質調査を実施しました。これ以降、毎年 6 月に水質調査を実施するようになった。参加団体も徐々に増え、市民団体の他にも大学など 40 前後の団体・個人等が参加し、大規模な活動となった。また、調査範囲も荒川流域から利根川水系や新河岸川水系の河川や用水路へと広がった。2004 年からは全国水環境マップ実行委員会による“全国一斉水質調査”がスタートしたため、実行委員会へ参加しての活動となった。2019 年は、鴻巣の環境を考える会による一斉調査を 6 月 2 日に実施した。

一斉水質調査鴻巣地区拡大マップ



ID	河川名	市町村名	調査地点名	調査日	時刻	気温°C	水温°C	COD	EC
Ar32	荒川本川	鴻巣市	大芦橋	6月2日	7:55	29	23	2	40
Ar33	荒川本川	鴻巣市	武蔵野水路合流直前50m	6月2日	5:50	22	18	2	20
Ar34	武蔵水路	鴻巣市	赤見橋	6月2日	10:50	24	18	3	20
Ar35	氷川神社	鴻巣市	馬室ホテル池湧水	6月2日	7:50	22	18	5	30
Ar36	荒川本川	鴻巣市	御成橋左岸上流300m	6月2日	9:30	26.5	20	2	20
Ar37	斜面林下	鴻巣市	滝馬室1489地先(上間)	6月2日	8:00	24		5	30
Ar38	石田川	鴻巣市	原馬室914	6月2日	7:30	22	20	8	40

2019 年度一斉水質調査結果 (鴻巣の環境を考える会実施分)

(2) 荒川流域の生きもの調査

鴻巣市立赤見台第一小学校 5 年生 54 名とともに、元荒川の水質調査及び生きもの観察会を実施した。また、鴻巣市が進めている“鴻巣コウノトリを育むモデル水田”でも、無農薬栽培水田における水質調査や生きもの調査、魚道設置などを行っている。



(3) 荒川流域ネットワークのアユ調査

荒川流域ネットワークでは、天然アユ復活に向けた活動を行っている。標識をつけた稚アユを放流し、遡上状況等について定期的に追跡調査を行っている。今年度は、稚アユの確保に苦労したが、入間川では概ね 2,000 匹、越辺川では 1,000 匹のアユを放流した。



アユ調査の様子

(4) 荒川流域の自然再生

荒川太郎衛門地区自然再生協議会では、流域の自然再生に向けて生態系モニタリング調査、維持管理や広報活動等を行っている。2018年秋には、イベントとして親子昆虫観察会を開催し、自然再生の現場を知っていただくとともに、親子での体験を楽しんでいただけた。



4 まとめ

参加者の中から質疑、意見を受けながら分科会としてのまとめを司会から、次の言葉で締めくくりました。「私たちのそれぞれの地域での活動から自然環境や生物多様性に働きかけを強めて、持続可能な社会とSDGs活動につなげていきましょう」



分科会「私ごとから考えるごみ問題～私たちが今やるべきことを考えよう～」

目的

【参加者数 37 名】

食品ロスの問題は持続可能な社会を目指す上で、大きな課題となっています。とりわけ生ごみの削減は私たち消費者が取り組める身近なテーマであります。今回生ごみの発生抑制と有効活用に関する点を中心に議論することで、ごみ問題に理解を深め、自分ごととして食品ロスをどう削減できるか、またどのように取り組むべきかを考える機会にする事を目指しました。

プログラム

- 1 講演「未来へつなぐもったいない」
宮川 和之氏（コープデリ連合会 CSR 推進部企画担当）
- 2 講演「ごみの資源化を進めよう」
土淵 昭氏（NPO 法人さやま環境市民ネットワーク理事）
- 3 質疑応答

開催概要

1 講演「未来へつなぐもったいない」

宮川 和之氏（コープデリ連合会 CSR 推進部企画担当）

（1）日本の食品ロスに占める消費者の責任は大きいし、消費者の行動が変わることによって、製造者や流通業者も変わっていく。

- ①平成 28 年の食品ロス 643 万トンのうち、事業系は 352 万トン、家庭系は 291 万トンになる。
- ②事業系は年々減少傾向にあるが、家庭系は増加している。
- ③事業系ロスにカウントされているもののうち、実質的には消費者の購買行動によるロスがけっこう多い。

例イ 売り場の陳列量は、売れ数以上に置かざるを得ない。（品薄感が嫌われる）

例ロ 日付の新しいものを求めすぎる。（1/3 ルールの原因でもある）

例ハ 小さな包装破れでも買ってくれない。

例ニ 農産物など規格にこだわり過ぎる。

これらによるロスは事業系ロスにカウントされるが、消費者の購買行動が変われば確実に減少する。すなわち売り方の責任もあるが、買い方の責任も大きいのではないか。（SDGs 目標 12）



(2) 簡単便利で美味しい調理済み食品が進化し、また核家族化が進んだため調理の機会が減り、作り手側の現状を理解できなくなっている。その結果食品を無駄なく使い切るという意識が働きにくい。消費者が、生産段階や流通段階でのロス原因に想いを馳せることで、もっとロスは減らせると考える。それがSDGsの目標17の「パートナーシップ」では。

(3) コープの取り組み事例の紹介

① コープは組合員との意見交換を重ねながら、フードチェーンに関わる各段階のロス削減に取り組んでいる。

例イ 規格外農産物の商品化

例ロ 悪しき慣習である納品1/3ルールの見直し

→賞味期限180日を超える商品については、1/2ルールに変更
(メーカーにもメリット)

② 店舗における食品廃棄物のリサイクル推進

賞味期限切れ商品、調理・加工残滓、廃油など

③ フードドライブの取り組みで、食品ロス削減に努める。

フードバンクに寄贈している商品例

包装破れ品、不良品発生に備えて余分に買い付けた商品、組合員から寄贈された余剰品、返品紙おむつ(年間6千枚以上)などの非食品

④ 組合員のエコクッキング教室などで、生ごみ削減につながる調理方法の紹介・交流。

(4) まとめ

コープとしては「食卓を笑顔に、地域を豊かに、誰からも頼られる生協」(ビジョン2025)を目指し、目標12「つくる責任、つかう責任」を中心に、SDGsの達成に貢献したい。

2 講演「ごみの資源化を進めよう」

土淵 昭氏 (NPO 法人さやま環境市民ネットワーク理事)

(1) 狭山市の現況

① 少子高齢化による税収減、福祉予算増などで財政が厳しくなりつつある。

② 人口増につながる誘致策や、観光客を呼びこめる施策が見当たらない。

(2) 燃やすごみを減らすことで、市の予算100億円の削減を目指す。

① 燃やすごみはごみ全体の73.3%もあり、これを資源化することが重要。

② 現在のごみ焼却炉(稲荷山環境センター 平成8年稼働)は老朽化が進み今後10年くらい先には建て替えが必要になる。現在と同規模の焼却炉を建設すると、150億円以上かかると見込まれる。

③ 燃やすごみの内、水分の多い生ごみが約40%を占め、これを燃やすため古紙・古布・



廃プラ・剪定枝等を助燃材として一緒に燃やしている。

- ④そこで、生ごみを別収集して資源化出来れば、助燃材の必要性が無くなり他の物も資源化の道が開け、焼却炉もごく小さくすることができる。

(3) 狭山市における生ごみ堆肥化の取り組み

- ①平成14年度より業者「大誠産業（株）」に委託して、生ごみ堆肥化に取り組んでいるが、順調とは言えない。

H14年度 80トン → H17 452トン（ピーク） → H29 158トン

- ②現在の生ごみ発生量約12,500トンに比べ、堆肥化は、わずか1.3%（ピーク時でも3.5%）

(4) 狭山市での生ごみ堆肥化が減っている理由

- ①堆肥化は希望者のみで全市一斉ではない。
- ②週一回のバケツ回収のため中身の腐敗、手間ひま（バケツの引き取り、業者の移し替え回収）等の問題がある。
- ③堆肥化委託コスト（50円/kg）が焼却コスト（40円/kg）より高いため、市も熱が上がらない。

(5) 生ごみ堆肥化の他市事例

- ①埼玉県では久喜・宮代衛生組合が最も多くの生ごみ堆肥化を行なっているが、それでも生ごみ堆肥化率は5%程度にとどまる。
- ②週2回の回収で袋収集なので、臭いや手間ひまの問題はない。
（ただし袋がごみになるのが欠点）
- ③コストは狭山市と同レベルの50円/kg程度であり、設備規模の関係でこれ以上の増量計画は無い。
- ④その他の県内事例（戸田市、吉川市、ふじみ野市、小川町）は、いずれも小規模にとどまっている。

(6) 生ごみ堆肥化の重要性

- ①農業における化学肥料削減の観点からも、生ごみ堆肥化は極めて重要と考える。化学肥料の3要素の内、窒素肥料は製造工程で莫大なエネルギーを要し、温暖化を進める。
- ②リン酸肥料とカリ肥料は原料が鉱石であり、日本は全量輸入に頼っている。しかも生産国が偏っている上に、生産量も減少している。特にリン鉱石については、将来リン酸含有量の減少が懸念されていて、確保が困難になりかねない。
- ③化学肥料への依存度を減らすためにも、国内で調達できる生ごみや糞尿などの堆肥化が必要になってくると思われる。

(7) 堆肥化に代わる生ごみの資源化

- ①生ごみの堆肥化が重要であることは確認できたが、処理コストの問題などの壁があり、このままでは燃やすごみ全体の資源化は困難である。
- ②そこで注目したのが、生ごみのバイオ処理・メタン発酵（ガス利用、発電）である。
- ③バイオ処理の実例について3社を調査し、いずれも堆肥化に比べローコストであるこ

とが分かった。

A. バイオエネルギー（株）（東京都大田区）、B. 神立資源リサイクルセンター（茨城県土浦市）C.（株）長岡バイオキューブ（新潟県長岡市）、とりわけCの長岡市の事例に注目した。

（8）長岡市の生ごみバイオ処理

- ①長岡市では、全市の生ごみをバイオ処理・発電に活かすべく 2013 年に上記会社 C を設立・出資した。これにより従来エネルギーをかけて燃やしていた生ごみを、発電資源化（12 万 3 千 kwh/日）でき、コスト的にも燃やすよりはるかに安くなった。
- ②工場の建設費は 19 億円（うち国からの助成金 8.6 億円）、敷地面積は 1 ha である。
- ③長岡市は 15 年間の維持管理費および生ごみ処理費として、28 億円/年で管理会社と契約した。長岡市のように、狭山市も生ごみでバイオ処理発電を行えば、現在の燃やすごみの収集処理費に比べ、年間 2.7 億円程度のランニングコストを節約できると試算している。

（9）バイオ処理工場の改善点を考える

- ①上記 ABC の 3 社とも、バイオ処理後の固形物は乾燥焼却もしくは固形燃料化であったが、これを堆肥化する。
- ②また発生する残液を下水に流しているが、これにも肥料の 3 要素が含まれており、後述する剪定枝等のバーク堆肥を作る際に必要な水分補給に利用して、無駄なく活用する。

（10）生ごみ以外のごみの資源化（案）

- ①生ごみを別処理できれば、燃焼ごみのうち約 31%ある紙・布を助燃材にする必要がなくなる。但し有効活用するためには、徹底した分別が必要になる。（紙おむつなども別収集が必要）紙ごみを資源化できれば、狭山市だけで毎年東京ドーム 84 ヶ所相当の森林を保護したことに匹敵する。廃プラも分別すれば鉄鉱石の還元剤等に活用できる。
- ②剪定枝はすでに別収集しており、助燃材にする必要が無くなればチップ化し、草・落ち葉とともに好気醗酵させれば、バーク堆肥として有効利用ができる。バーク堆肥化する時に醗酵熱で水分が飛ぶため水を補給する必要があるが、生ごみをバイオ処理した時に発生する液肥の利用することで、より肥料成分の多い有機肥料にできる。

（11）ごみの資源化には市民の理解と協力が必要

- ①資源ごみの活用には、収集段階での分別が徹底されていなければならない。その意味でも、ごみとして出せば高い料金を取って、資源として出せば無料にする、といった政策が考えられる。
- ②長岡市も市民の理解を得るために、説明会を繰り返し行なった。

（12）狭山市との協働

- ①NPO 法人さやま環境市民ネットワークは、上述の具体化ができれば燃やすごみの大幅削減ができ、新しい焼却炉建設費もわずかになり、ランニングコストも低減できると考え 2017 年 4 月、市長宛てに「ごみを減らし、市の財政を 100 億円以上節減する施策」

(案)を提言した。

②そして現在、狭山市資源循環推進課と、その具体化について協議を行なっている。提言施策の実現にはいくつものハードルがあるが、市民の皆様のご協力を得て是非実現したい。

3 質疑応答

(質問) プラごみなどのごみ削減策についてお聞きしたい。

(宮川) ◎組合員の協力で、回収できる容器の開発やコープ商品の改良に取り組んでいる。

◎カタログ注文から配送までの時間を延ばすことで、事前の作り置きロスは減らせる。

◎個別包装にすればロスは減るが、プラごみ増加につながるジレンマがある。

◎消費者がエコや素材にもう少し関心を持ってくれば、商品は変わる。

(会場) 過剰包装については、消費者の意識とライフスタイルが変わらないとダメ。

(質問) 弁当容器の脱プラは可能か？

(宮川) ◎今のところ困難で決め手が無い。生分解性プラや植物由来プラの利用もコスト吸収が困難。

◎レジ袋の有料化については生協が先行していたが、ようやく業界全体の足並みがそろった。

(会場) 生分解性プラについては、有害薬剤使用の問題もある。安全性確保が重要。

(質問) リターナル容器の取り組みについて伺いたい。

(宮川) ◎かつてコープもビンのリターナルを行っていたが、洗浄など環境負荷を考えるとプラ容器の使用とどちらが良いかという問題にぶつかっている。

(質問) 1/3ルールについて、小売業界として国への働きかけはあるのか？

(宮川) 行政と対立している訳ではない。ただバラバラはまずいと考えている。

(司会) 1/3ルールは規則ではない。

(会場) 国として1/3ルールの見直し提言は出ている筈。

(質問) バイオ処理工場の設備費用、管理、耐久年数は？

(土淵) 長岡市の例では15年間での償却を見込み、設備償却と管理費を合わせて15年間28億円で契約している。(講演2参照) 狭山市に置き換えれば、年間2.7億円程度のコスト削減になると見込まれる。

(司会) 工場の規模でコストは変わる。大型工場にして規模のメリットを追求するのか、狭い範囲のごみを集めて地域ごとに小さな規模の工場にするのか、2つの選択肢が考えられる。

(質問) 狭山市で具体化する場合、どんなハードルがあると思われるか？

(土淵) ◎迷惑施設を造ろうとすると、必ず反対運動が起きる。長岡のバイオ処理施設の場合、工場内は臭いがあるが、工場の外側はまったく臭わない。しかしごみ処理施設と言うと、必ず臭いの問題が懸念される。それが最大のハードルと言える。

◎生ごみを分別するため、収集方法を変える必要がある。それを住民に理解してもらわなければならない。それが2つ目のハードルと考える。

(司会) 住民の理解と、分別の手間ヒマが必要ということですね。

(土淵) 実行に当たっては、思い切った料金制度にすることも必要と考えている。生ごみをはじめとする資源ごみは無料、燃やすごみについては、高額にするのも一つの方法ではないか。

4 まとめ

講演1では、事業系の食品ロスとしてカウントされている物のうち、実は消費者のエゴによって発生している食品ロスが、かなり含まれているという宮川氏の指摘など、参加者の視点拡大に大いに役立ったと思われます。

講演2では、生ごみを資源化することによって燃焼ごみを大幅に削減でき、肥料の節約にもつながることが分かり、目指すべき一つの方向性が明らかになったのではないのでしょうか。いずれにしても、分かりやすい講演と熱心な質疑応答を通して、参加者各自の食品ロスと生ごみ減量化への課題がより明確になった分科会と評価いたします。

分科会「SDGs を知ろう！入門編～自分たちで関われる取組を考えよう～」

目的

【参加者数 62 名】

SDGs に取り組む企業・団体・大学等の事例報告を受けた後、個人の立場で関われるものは何なのかを模索します。発表後は対話の時間を設定し、スピーカー、リスナーいずれにとっても学びの場とし、参加者全員が自分にとっての SDGs を明確化し、発信できることを目指します。

プログラム

1 SDGs のやさしい解説

袖野 玲子氏（芝浦工業大学システム理工学部教授）

2 SDGs の取組発表

- (1) 東洋大学 TIPS（国際政策研究会）
- (2) 芝浦工業大学 SDGs 学生委員会～綾いと～
- (3) 城西大学 経営マネジメント総合学科 志田ゼミ
- (4) 獨協大学 経済学部国際環境経済学科 米山ゼミ
- (5) 日本工業大学 学生環境推進委員会
- (6) J-POWER 電源開発
- (7) NPO 法人エコツーリズム・ネットワーク・ジャパン

3 会場ダイアログ

4 まとめ

開催概要

1 SDGs のやさしい解説

袖野 玲子氏（芝浦工業大学システム理工学部教授）

SDGs (Sustainable Development Goals) は、持続可能な開発目標と言います。2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟国が 2016 年から 2030 年の 15 年間で達成するための 17 の目標です。

1992 年のリオの地球サミットでは、今の世代だけではなく、将来世代も発展成長できるとの意味が込められた持続可能性が定義されました。

SDGs は目標であり、我慢することではなく、発展するための戦略との位置づけです。達成するためには、環境・経済・社会の 3 つの要素を調和させることが不可欠です。環境は、プラネタリーバウンダリー（地球の限界）という考えのもと、資源には限りがあり、生物の絶滅は二度と戻せない事です。経済は、これまでの様な強欲・利益追求では格差が広がり、破綻してしまう事です。社会は、テロ・移民問題など多くの問題が顕在化している事です。



17の目標を見ると、1～6（途上国向けの課題で先のMDGsの継続）、7～12（先進国でも問題になっている項目）、13～15（環境課題）、16（平和）、17（パートナーシップ）となっており、環境・経済・社会を包括的に網羅しています。例えば目標の関連性を考えると、13（気候変動に具体的な対策を）に対応すると7（クリーンなエネルギー）・6（水不足）・14（海の豊かさ）・15（陸の豊かさ）17（パートナーシップ）・4（質の高い教育をみんなに）など多くの課題に関連していることがわかります。つまり、SDGsの17の目標は、環境・経済・社会の課題を包括しています。そして、SDGsのスローガンは『誰一人取り残さない』。一部の人の利益だけでなく、弱い人も含むすべての人が成長する、より良い社会を目指そうとしているのがSDGsです。

2 SDGsの取組発表

(1) 東洋大学 TIPS（国際政策研究会）

- 1) 活動テーマ：SDGs・ダイバーシティー × 学生の成長
- 2) 目標：SDGsを知るだけでなく、もう一歩踏み込んで自分毎として考え実践する。
- 3) 活動例：①〈HURT PRIZE@TOYO UNIV.〉ソーシャルビジネスのアイデアを競うコンペに参加。アイデアを発信する力を向上させている。
② 環境教育活動〈A I（アイ）〉インドネシア・バリ島の田舎で現地NPO・学生と協働でESDをスタート。ゴミ処理の文化などを伝えている。
③ 身近なところからSDGsを考えるコンテストで「マイボトル推進」を企業と協働で推進。特別賞受賞
④ SDGsに取り組む大学のプラットフォームの立ち上げを検討中。

(2) 芝浦工業大学 SDGs 学生委員会 ～綾いと～（2019年5月～活動）

- 1) 目的：大学生の自発的なSDGsに向けたアクションを「より多くの人にSDGsを他人事とせずに関心を持ってもらう」ことへ繋げる。
- 2) 活動例：①地域の子供向けに「子供大学」を開設。専門知識を生かして、自由研究の題材の提供などを行っている。
②地域の夏祭りに、他大学へも呼びかけしながら、キャンドルナイトに参加。キャンドルアートの展示を実施。地域との絆が強くなった。
③第1回次世代SDGsフォーラムの前段で「SDGs月間」を企画。地域の方および学生に、SDGsについて学ぶイベントを開催した。

(3) 城西大学 経営学部マネジメント総合学科 志田ゼミ

- 1) テーマ：持続的成長社会に向けた環境経営の研究
- 2) 活動例：①A Iを使った社会課題解決（ビニール傘を多く使う日本の課題解決）アメダスの天気予報に雲の動きデータをA Iに学習させ予報精度を向上。アンブレラレンタル場位置情報を予め登録し、上記天気予報から降雨情報を通報すると同時にレンタル場を教え、濡れずに行動できる様にする。予

想効果は、天気予報精度向上・ビニール傘消費削減・プラゴミ削減。

②A I 技術でゴミ分別システムの構築（日本はゴミ分別意識が低い）

画像認識技術で、ゴミの分別の自動化を図る。

併せて、画像により分別に関するバーチャル教育を実施する。

また、この作業に携わる作業員のユニフォームも明るくし、イメージアップに繋げる。

予想効果は、自動化で人手不足解消・分別意識向上・作業イメージアップ。

(4) 獨協大学 経済学部国際環境経済学科 米山ゼミ

1) テーマ：グローバル化と持続可能な開発

2) 活動例：①全学ライトダウンプロジェクト

学内使用電力量分析で照明が 60%を占めており、省エネ活動を開始した。

6月より昼休みのライトダウンを実施。(3回/週)

結果、5か月で1世帯当たり相当する電力が削減でき、アイデア賞受賞。

②Fridays For Future : 気候のための学校ストライキに参加。

③打ち水で夏の暑さを吹き飛ばそう(伝統文化の浴衣と打ち水で涼を感じてもらいながらエネルギーを削減)

埼玉大学と連携したり、草加よさこい・熊谷打ち水大作戦に参加。

④Earth Week Dokkyo 2019 開催(年2回行うエコイベント)

ライトダウン・SDGsを考える・地産地消マルシェの開催・J-Power

電源開発のエコ×エネプロジェクトへ参加などで活動を展開。

(5) 日本工業大学 学生環境推進委員会

1) 独自の環境推進：学生環境活動方針に沿った活動で「5つ星エコ大学」「サステナブルキャンパス ゴールド認証」の評価を受けている。

2) 活動例：①リサイクルショップ (2003年～実施・・・実質はリユース)

卒業生から家具・家電を回収し整備・清掃後、新入生に無料で配布。

今年は、家具 397点中 336点を配布、余りを町役場へ寄付した。

②埼玉県・地域と連携して子供大学を開催

物作りの楽しさや環境への意識高揚のため、3Rの教育・紙パックの万華鏡作り・割りばしのゴム鉄砲・紙パックの紙飛行機などを一緒に製作。

③地域の町民祭りで竹鉄砲作りやエコ遊びを企画、夜は防災・安全活動実施。

④利根川強化堤防森づくりのボランティアに参加

自治体・近隣住民と協働で、堤防斜面に 475本の木を植樹し整備中。

(6) J-POWER 電源開発 秘書広報部専任部長 藤木 勇光

企業が取り組む CSR(社会貢献)活動としての「J-POWER エコ×エネ体験プロジェクト」の様子を紹介。また、こうした活動の背景にある CSRの考え方が、SDGsの考え方と共通するものであることを紹介した。

1) エコ×エネ体験プロジェクト

①大事にしているキーワード：体験・楽しいこと・協働・学び合い・つながり

②2019 大学生水力編ツアー（奥清津・奥只見）

1 日目：発電所・ダム見学で大きな水車・太いシャフト・こんな音を体感。宿で夕食・自己紹介・交流会開催

2 日目：遊覧船で森へ。森の自然体感と、森と電気の繋がりを学習。体験を整理し、夕食後ナイトハイクと交流会で感じたことを Out Put。⇒（明日の準備）

3 日目：朝の散歩・草笛・エコパーク見学、そして「こんな社会だったらいいな」のエコ×エネ宣言。・・・・・・・・・・（火力編もある）。

2) CSR（企業の社会的責任）と SDGs（17 の目標）

企業にとって経済価値の追求だけでなく、社会の発展、環境保全・再生が求められている。これは、SDGs の構成と共通する考えとなっている。身近なことも、視野を広げることで、実は世界と繋がっていることがわかる。まずは、広く知ることから。「かくありたい」と考え、仲間と一緒にパートナーシップで行動しよう。

(7) NPO 法人エコツアーリズム・ネットワーク・ジャパン（共催：リボーン）

代表取締役 壹岐 健一郎

旅を通じて発見、体験、貢献できる SDGs の国内外の事例を紹介し、自分たちの身近でできることは何かを一緒に考えてみたい。

1) SDGs に関連した 1 年の活動を報告。（記録画像で説明）

①北海道：アニマルウェルフェア体験とおいしく食べようのツアー。

②南ドイツ：再生可能エネルギー促進タウンの見学。（シェーナウの思い）

③福島：天ぷらバスで行くオーガニックコットン収穫のボランティアプロジェクト。天ぷらバス：廃食油から再生（リボーン）したバイオディーゼルで運行するバス
その他、いろいろなエコツアー・ボランティアツアー・ホームステイツアーを企画している。

2) みんな、旅に出よう！






最近若い人は旅に出ないと聞きますが、是非世代を超えて価値観が共有できる人と体験・対話し、いろいろな知見を確認することで幅を広げていくと良いと思います。

3 会場ダイアログ

参加者全員が「自分にとっての SDGs」を表明し、これについて全員で対話を行った。



会場から出された「自分にとっての SDGs」(一部抜粋)

主な目標	自分にとっての SDGs
	<p>いらない服や物を貧しい国へ送る</p>
	<p>飢饉に苦しむ人達に、ただ食料や水を与えるだけでは根本的な解決にはならないため、その土地で育つ作物の育て方や水源の作り方・安全面・衛生面を考慮したノウハウを教えていき、現地の人が教える立場になれるよう教育する。</p>
	<p>節水・節電をマンション全体で取り組む。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGs に配慮した商品やサービスを積極的に選ぶ。(エシカル消費) ・食事で食べ物を残さない。食べきれない量の食材は買わない。
	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGs アクションを促進する媒体になる。社会貢献する楽しさや、成長を感じながら自分のやりたいことができる面白さを皆に教えて促進する。 ・学生の活動の点と点をつないで線とする。まさに今日みたいな場もそうだが、誰一人とり残さない」事も含めて、SDGs に向かう人は繋がっていく、一つになるワンチームだと思う。

4 まとめ

分科会『SDGs を知ろう！入門編』へ参加いただき、誠に有難うございました。SDGs の 17 の目標は、地球を守るための世界共通の社会課題となっています。袖野教授の講義でも「持続可能な」がキーワードになっており、裏を返せば対応が遅れると持続できないことを意味します。

今日は、大学生・企業・一般の世代を超えた方が集まり、それぞれ SDGs に関する活動および、自分にとっての SDGs について語り合いました。特に 5 大学生の事例は、特質を生かした活動・グローバルな活動・地域との連携を大切に活動など多くの発表があり、大変驚きました。また、企業では CSR (企業の社会的責任) として 5 感を生かした教育を実施したり、NPO では世代を超えたツアーの企画でパートナーシップを学ぶなどの報告がありました。自分事として考える SDGs では、マンション全体で節水・節電しようなど「Think Globally, Act Locally」な提案もたくさん頂きました。

まずは 2030 年の目標に向けて、みんなで行動して行きましょう！

分科会「環境経営の今・これから～環境経営の深化、SDGs 経営の拡大に向けて～」

目的

【参加者数 49 名】

気候変動による影響が顕在化するなか、パリ協定を踏まえた環境経営は益々重要となっています。同時に環境・経済・社会の課題解決に統合的に取り組む SDGs 経営も大企業を中心に拡がり始めています。企業等の具体的な取組事例を共有し、環境経営、SDGs 経営をいかに拡げ、根付かせていくのか、参加者全員で議論を進めました。

協力機関：川越環境保全連絡協議会、埼玉県中小企業診断協会 SDGs 共創経営研究会、
日本経営士会埼玉支部環境経営研究会

プログラム

- 1 SDGs に関する情報共有
- 2 事例発表
 - (1) 辰野 聡彦氏（パイオニア株式会社経営管理本部コーポレート
コミュニケーション部 CSR・環境推進課 課長）
 - (2) 長谷川 正氏（株式会社長谷川製作所 代表取締役）
 - (3) 後藤 究氏（株式会社タカヤマ営業部 課長・神奈川営業所 所長）
 - (4) 平田 俊一氏（秩父森づくりの会）
- 3 パネル・フロアディスカッション

開催概要

1 SDGs に関する情報共有

環境経営分科会は、2017 年 12 月に獨協大学で開催した第 8 回低炭素まちづくりフォーラム in 埼玉において、初めて実施しました。この時点では、SDGs はまだあまり知られていない状況であったため、環境経営に関する歴史的経緯や SDGs の登場の背景とその内容などについての基調講演の後、温室効果ガス排出量の削減や環境マネジメントシステム、再生可能エネルギーの創出などに取り組む企業や団体の事例発表を聞いて、環境経営の実際を知るとともに、こうした取組が今後 SDGs の取組へと発展させていく必要性と可能性について確認しました。

今回は、あれから 2 年が経過し、SDGs の認知度も当時よりは高まっていることから、まずは、分科会全体のモデレーターを務める環境ネットワーク埼玉の星野弘志氏から、「環境経営から SDGs への流れを把握するための情報共有」として、10 分程度、説明が行われました。

“情報共有のまとめ”

- 我が国では環境経営は伸び悩み気味。しかしパリ協定に則した取組が世界の潮流になりつつある。
- 2030年のあるべき姿を定めた世界の共通目標であるSDGsを企業の存続・発展のコンパス（羅針盤）とするSDGs経営が大企業を中心に拡がりをみせている。
- ESG投資の拡大などがそれを後押ししている。
- SDGsの中小企業への浸透はまだ途上にあるが、先進的企業も出てきている。
- 中小企業は、SDGsの潮流をリスクとするか・チャンスとするかの今、岐路にある。

ここでは、2015年9月の国連でのSDGsの採択を受け、我が国の政府や経団連などの経済界の積極的な姿勢もあり、SDGsの取組が広がっていること、特に、SDGsは企業の社会的責任（CSR）を推進する上でキーとなるものであり、同時にビジネスチャンスにも繋がることから、大企業での取組が進んでいること、財務状況の他に環境・社会・ガバナンスの状況を評価して投資を行うESG投資の世界規模での拡大がこれを後押ししていることなどが説明されました。しかし、中小企業ではSDGsの認知度はまだまだ低い状況であること、一方で先進的に取り組み、発展に繋げている中小企業も出てきていることが説明され、中小企業にとって、環境経営やSDGs経営の取組は、今後、企業を持続的に発展させる上で極めて重要になっているとの認識を共有しました。

2 事例発表

(1) パイオニア株式会社

パイオニアはカーエレクトロニクスの大手メーカーですが、ISO14001の環境マネジメントシステムを構築・運営してきたなかで、ESG投資の拡大の流れを受けて、外部講師などの講義を通して役員の意識改革に取り組み、「社会課題に本業で取り組まなければ企業は生き残れない！」との認識について、社内共有を図ったそうです。そして、「地球・社会のサステナビリティ貢献の最大化」を目標にSDGsの取組を始め、中期経営計画と一体的に運営しながら、企業価値の向上に取り組んでいるとのことでした。



(2) 株式会社長谷川製作所

SDGsの取組を始めて1年程度という長谷川製作所は、照明器具等の開発・製造・販売を行う従業員40数名の中小企業です。SDGsに出会い、社長自ら、導入する目的は何か、企業にとってのメリット・デメリットは何かなどを模索するなかで、「まずは、やってみよう！」と決断して、取組を始めたそうです。まず、社長も含め従業員一人ひとりがエコドライブや食品ロスの削減、マイババック持参など自分ができることをリストアップして、SDGsに紐づけを行い、これを推進しました。そして、従業員の自主性を重んじてES（従業員満足度）向上委員会を中心に、社員と家族、取引先、地域社会、お客様という四方の幸せの追求に向けて取組を推進しているとのことでした。



(3) 株式会社タカヤマ

タカヤマは、本庄市や福島県に処理場を有する県内大手の産業廃棄物処理事業者です。産業廃棄物処理業は、社会からのイメージ、法律に縛られる、社員の肉体的な負担などの特徴を有するなかで、「地域や企業（排出事業者）から日本一信頼される優良企業へ」をスローガンに ISO14001 やエコアクション 21 の認証を取得し環境経営を推進してきました。SDGs に出会い、いち早くこれに取り組むべく、タカヤマアカデミーという社内研修機関で社員教育に努めたそうです。1年目には、社員全員がSDGsを勉強し、2年目は課題の抽出とアイデア募集を行い、3年目は個人のプライベート目標の設定を行うなど着実にステップアップさせてきました。現在は、社員のアイデアから生まれた会社活動目標を推進しています。しかし、「社員が実感できる成果が見いだせない」「社員のやるが増える」といった課題も少しずつ見えてきたようで、「どのようにSDGs活動を効果的に進めていくのかは常に手探り状態です。」との課題も披露されました。



(4) 秩父森づくりの会

平田氏は、森林経営に適さない私有林をいかに健全化するのか、災害の原因になる林地残材の問題などを解決するための方策などを検討するなかで、自らが長年苦しんでいた花粉症を改善するために、森林に放置されている枝葉を活用することを思い付いたそうです。枝や葉を蒸留してアルコールで抽出した液を小型加湿器にかけ、蒸発散（「森林浴フェーム」と名付けられています。）させて、これを就寝中に体内に取り込むことで、自らの花粉症を劇的に改善させたそうです。そこでSDGsの視点に立って、これをなんとかソーシャルビジネスとして成り立たせることで、森林の保全、地域での雇用の創出、花粉症で悩む方々の健康の維持改善などにつなげていきたいとの強い想いから、今回、発表・提案を行ったとのことでした。



3 パネル・フロアディスカッション

続いて、これらの発表を受け、「どのようにして、環境経営を深化させ、SDGs経営を広げていくのか？」をテーマにパネリストとフロアの参加者によるディスカッションが40分間程度行われました。パネリストには、事例発表の4名の発表者に加えて、協



力団体から埼玉県中小企業診断協会 SDGs 共創経営研究会の高重和枝氏、日本経営士会埼玉支部環境経営研究会の高橋洋子氏、川越環境保全連絡協議会の鈴木崇弘氏が加わりました。

議論は、まず、次のような、会場からの極めて核心を突いた質問・意見から始まりました。「事例発表の中で、環境経営や SDGs の取組には手間がかかり負担となるという話がありましたが、それを乗り越えるにはいかに成果に繋げるかだと思います。この課題を克服するために如何に取り組んでいったらいいのでしょうか。」



これに対して、大手企業では、環境経営や SDGs に取り組まないことは大きなリスクになるため、そのリスクを回避することが成果であるとの考えが披露され、CSR 報告書などを通して積極的に SDGs の取組を社会に発信していることが紹介されました。また、中小・中堅企業では環境経営や SDGs の取組は、人材育成や従業員満足度の向上のうえで有用であり、それを成果にいかにつなげるかが重要であるとの意見が出されました。また、人手不足の時代において、他社との差別化を図ることで人材確保の面でも有利に働くことが期待でき、それを成果として捉えることができるのはとの意見もありました。

次に、従来の取組を SDGs にただ紐付けするだけで何の進展もなければ、SDGs ウォッシュ（騙り）と言われてしまうことを避けるために、いかに取組を発展させていくのかという議論になりました。今回の発表のような従業員参加の成功事例を踏まえ、SDGs の取組を発展させていくためには、経営者と従業員、従業員間のコミュニケーションの充実が重要であるとの意見や、キーマンとなる人を見つけることや女性の視点を重視することが重要であるなどの意見が出されました。

最後にモデレーターから、次のようなまとめがありました。「環境経営や SDGs の取組を継続・発展させていくためには、それが企業価値の向上に繋がっていくことが重要です。企業価値の向上のためには、本日、議論したような企業自身の努力も不可欠ですが、同時に環境経営や SDGs 経営に取り組む企業をより重視する社会づくりも重要です。本日は様々な分野の方々にご参加いただきました。ESG 投資の拡大の流れは地方金融にも及んでおり、中小企業向けの地方金融機関の取組もさらに充実させる必要があります。行政も SDGs 経営等に取り組む企業を認定するような仕組みを作ってインセンティブを高めることも SDGs の普及には有効だと思われます。SDGs はまだまだ中小企業や一般の方には馴染が薄いものです。私たち NPO は、SDGs の認知度向上や SDGs 経営の重要性を訴えるための普及啓発活動をさらに進める必要があります。そして、市民や消費者が、そうした企業の製品やサービスを選択する社会づくりを皆で進めていくことが必要なのではないのでしょうか。本日のフォーラムと分科会がその一助になれたなら幸いです。」